# 審査論文の要旨

本論文は、古墳時代の開発の特質と集団が統合される過程を、考古学的な分析により明らかにすることを目的とし、古墳時代中期の大阪平野の開発を中心に、王権の伸張とも関連付けて、膨大な発掘調査成果をもとに検討を進めたものである。そのために、緻密な土器研究を基礎として年代の枠組みを提示し、その上で集落遺跡の展開過程から、開発の進み方を丁寧にあとづけ、集団の統合過程をあぶりだそうとした。遺跡に対する調査成果を積みあげて、地域の歴史、さらには列島規模の変化を見通そうとした論考であると言える。

大阪平野における遺跡調査の成果は膨大な量に積み上がっている。その成果を適切に処理し、一定の歴史像を描くには多くの労力を要する。本研究では、こうした労を厭わず、長期にわたる遺跡の変遷をふまえたうえで、古墳時代に焦点を当て、とりわけ中期における開発が地域社会の形成にとって大きな役割を果たしていることを明確にした。同時に、王権膝下という地域性から、集団の統合過程についても論及し、国家形成に議論に資する結論を得ている。

本論文は、全5部で構成され、序章、終章を含めて全18章からなる。序章において目的と課題を提示し、第1部と第2部では土器を扱い、第3部から第5部で集落遺跡の分析をおこない、終章をまとめとしている。

第1部では、まず、集落研究と土器研究の関係を論じ、集落動態の検討にとっても土器編年が不可欠であると結論づけ（第1章）、大阪府藤井寺市の津堂遺跡の成果にもとづいて、詳細な土器編年を提示する（第2章）。古墳時代中期については、異なる系統の土器が同時に展開することから、編年にも見解の相違があったが、それらを整理したうえで、年代の枠組みを提示した。

第2部においては、古墳時代前期から中期に土器についてより詳細な検討をおこなう。これまでも進められてきた土師器の系統分類について具体的にとりあげて、土師器の組成の変化に画期を見出し（第3章）、その組成の違いが集団差に起因することを明らかにしたうえで、古墳時代中期において集団が再編されたことに言及した（第4章）。さらに土師器の布留形甕にみられる肩部施文を取り上げ、それが集団の相違によるものであることを明らかにし、肩部施文を持つ土器の出土比率を検討することから、土器の流通にも言及している（第5章）。そして、初期須恵器の一器形である器台のうち、コンパス文をもつものを取り上げ、その分布から「津堂型コンパス文器台」と呼び、陶邑窯跡群における須恵器生産の展開とは別に、朝鮮半島の金官伽耶の影響を受けて古市地域で独自に創出されたことを想定した（第6章）

第3部では　集落遺跡の動態を取り上げる。まず古市古墳群の最古の古墳である津堂城山古墳の周辺における集落の動向から、居住域の変化をともないながら開発が進んでいく状況を明らかにする（第7章）。また、淀川の北岸にある太田茶臼山古墳の周辺における集落の動向から、同様の開発の展開を読み取り、両者がともに王権の中枢域にあたることから、王権周辺の開発のモデルとなるとした（第8章）。こうした開発の展開する地域において、初期群集墳と呼ばれる新興集団の墓域がみられることから、こうした墓をメルク

マールに同様の開発を見出すことに道筋を付けた（第9章）。古墳時代におこる手工業生産の変化にも論及し、上述してきた開発の進展が5世紀前半なのに対し、手工業生産の変化が5世紀後半にあるとし、王権の内部領域が形成される過程について、より詳細にあとづけられるとした（第10章）

第4部では、河川交通の大動脈である淀川本流域の集落を考察する。高槻市域の集落の動向からは、古墳時代の初頭に全国各地の土器がもたらされることを明らかにし、こうした時期に往来の活性化があったとした（第11章・第12章）。その成果にもとづき、より淀川に近い遺跡である上牧遺跡の分析から、主要交通網が河川交通から陸上交通に連動して集落の消長が理解できることを示した（第13章）。このような淀川本流域にある遺跡を俯瞰することから、外来的な土器の出土がこうした淀川本流域に集中することがみとめられ、交易拠点として評価でき、同様の交易拠点は大和川流域についても同様であり、古墳時代の初頭に出現することを明らかにした（第14章）。

第5部では、地域の変遷を長期的にあとづける考察として、千里丘陵東縁エリア（第15章）と檜尾川扇状地（第16章）をとりあげる。その結果、古墳時代に成立する社会の拠点がそのまま古代へと継承される状況がうかがえ、土地利用も古墳時代中期の開発が画期になっていることを明らかにした。

終章では、以上の検討を概観した上で、古墳時代中期がその後の地域社会の展開を規定する画期となる時期であることを強調する。そして、大阪平野では、こうした変化が王権の膝下での状況を示すことから、王権を支える地域社会の構造がどのように成り立つのかを考える重要な手がかりになると結論づける。また、ここでの展開が全国的にモデルになった可能性があり、そのための比較研究にも道を付けるとした。